

牧師室から (2021. 8.1)

目下コロナが蔓延する中ではあるが、オリンピックが行われている。しかしその政治的、社会的問題は別として、ついテレビで見て面白くなってしまふ。中でも小生は体操競技を観るのが好きである。

5年前にピアニストの中村紘子さんが亡くなられたが、彼女のご主人は作家の庄司薫であり、また彼女自身もエッセイなどをよく書いていた。音楽家の中には結構筆の立つ人が少なくない。彼女のエッセイの中で、オリンピック競技でピアノの演奏に近いのは、フィギュアスケートであるというのを読んだときに、小生も以前より同じことを考えていたので、とても嬉しかった。ところがフィギュアスケートは冬のものなので夏の大会では行われぬ。そこでこれは自身の意見だが、夏の種目で言えば、ピアノやオルガンの演奏は体操演技に近いと思っている。なぜならそれにはフィギュアスケートのよう技術点や美しさ、ある意味芸術性も評価されるし、数分間の間に一つの流れに沿って内容が展開されてフィニッシュ（カデンツ）となるからである。それに選手や演奏者は本番までに何十回、或いは何百回とその業なり曲を練習して、ミスが無いように完成させていく。それでも本番になるとあがってしまい、ミスをしてしまうことがある。いったんミスをするそれがきっかけで動揺してしまい、訳が分からなくなって、その後が崩れてしまうこともあるだろう。そのような時には途中でやめたくなくなったり、泣きたくなくなったりもする。そして終わった後は自己嫌悪に陥って、誰とも会いたくなくなってしまうものだ。

ただオルガンやピアノの演奏或いはフィギュアスケート、体操演技などと礼拝における奏楽はまた違うところもある。礼拝の奏楽は技術的な難易度を競うものではないし、また俗的に演出をするものでもない。奏楽には確かに技術面や芸術性を研鑽していくことも求められるが、何よりも信仰に裏付けられた真摯で端正な姿勢が大事である。当教会の先週の祈りの課題は「奏楽者のために」であったが、これからも引き続き奏楽者のために、教会の皆さんが共に祈り、支えていくことを願う。緊急事態宣言も発令され、不要不急の外出を控えている中で、奏楽者にはこれを是非、技術および信仰の研鑽の機会として頂きたい。

(鈴木淳一牧師)